

博士学位請求論文要旨

レヴィナスにおける存在と存在の彼方 ——悪(mal)を手がかりに——

中央大学文学研究科哲学専攻博士後期過程

小川真未

(1) 本論文の要旨

エマニュエル・レヴィナス(Emmanuel Levinas, 1906–1995)の思想全体を導くキーワードとしてあげられるのは、間違いなく「顔」や「他者」であろう。しかし、これらの重要概念には曖昧さが残る。というのも、これらの概念はレヴィナスの前期の思想においてすでに重要視されていたにもかかわらず、多くの研究は、レヴィナスにおける後期の思想を中心として出発しているからである。しかし、本来その思想全体を貫く重要なテーマであるものを、その全体から切り離し、後期の思想だけで明確に把握しようとするのは非常に困難なはずである。というのも実際、レヴィナスが「他者」というテーマを語ることになったのは、その思想の出発点において、「存在」に「悪」を見出し、その存在を乗り越えるためだからである。そして、このようにして導き出された存在を乗り越えた「存在の彼方」という概念は、後期においても「他者」と関連して重要な概念であり続けている。

しかし、レヴィナスの思想全体をそのように大きな視点から見ると、そこには重大な問題を見出すことができる。その問題とは、大きく3つある。1つ目は、悪たる存在から抜け出た先で至る善としての存在の彼方が、後期の思想においては「苦しみの過剰」としての「悪(mal)」によって可能になるとされていることだ。つまり、レヴィナスは存在という悪から逃れ、善としての存在の彼方に至ろうとしたにもかかわらず、その善たる存在の彼方に至るために「苦しみの過剰」という「悪」を要請しているようにみえるという問題である。さらに、この苦しみの過剰という悪は、そこで悪であるにもかかわらず、存在の彼方に至るための「善への通路」とされている。この一見すると矛盾したようにみえる事態が、2つ目の問題である。そして3つ目の問題は、善という存在の彼方に至るための苦しみの過剰としての悪、ひいてはこの「存在の彼方」そのものが、そもそも悪とされ、そこから脱出しようとしていた「イリヤ」という存在の概念と非常に似たものであり、それらに多くの関係や類似点があることである。すなわち、そこから逃れたいところの悪である存在そのものである「イリヤ」と、その存在から抜け出した先の善としての「存在の彼方」が類似しているという問題である。

これらの問題を解決するため、まずレヴィナスにおける悪を明らかにする。それによって、イリヤという存在に関し「悪」とされているのは、あくまでイリヤに接した際の存在者による「恐怖」であり、そもそもイリヤは「存在者なしの存在」であることから、実はイリヤそ

のものが「悪」であるとは言えないことを見出す。そして、存在の彼方に至るための苦しみの過剰としての悪も、実際のところ善悪という二項対立的な図式には収まらない悪であり、したがってこれも存在の彼方そのものが悪であることを意味しないことが明らかになる。そして、レヴィ＝ブリュールとの比較において見出すことのできたイリヤの具体的な性質を手がかりに、それらを存在の彼方と照らし合わせることで、イリヤと存在の彼方が実際に類似していることを明らかにする。これによって、これらの概念が実際に同じ次元であるという解釈の可能性を見出すことができる。その解釈を可能にするために必要な補助的解釈が、レヴィナス自身は区別していないところの「存在の彼方」と「他なるもののための身代りの一者」を明確に区別し、後者が両義的なものとして存在の領域に入り込んでいることを認めることである。この区別を明確にすることで、「イリヤ」と「存在の彼方」が完全に存在論的地平から超越した同じ次元であり、それらが違うものとして表現されるのはあくまでそれらを表現する存在者側の視点の違いであると考えられる可能性が開くのである。そしてこの解釈が実際に可能であれば、レヴィナス思想において見出される、さきに挙げた3つの問題点を解消することができることになる。

(2)本論文の構成

序論

第1章 レヴィナスにおける悪

第1節 イリヤの悪

第2節 レヴィナスにおける悪についてのこれまでの分類

第3節 自己繫縛の悪

第4節 「同」や全体性としての存在の内存在性の悪

第5節 苦しみの過剰としての悪

第2章 イリヤと存在の彼方の関連

第1節 イリヤと苦しみの過剰さの関連

第2節 イリヤと存在の彼方の関連

第3章 イリヤとレヴィ＝ブリュールの融即

第1節 存在者の私的な個別性の欠如

第2節 無としての死の不可能性

第3節 時間空間の超越

第4節 矛盾律を越えて、矛盾そのもの

第5節 表象ではなく情動の次元、非実体化

第6節 存在者が生じるところ

第4章 イリヤと存在の彼方のさらなる類似点と差異

第1節 脱内存在性と存在者の私的な個別性の欠如

第2節 存在の彼方と死の不可能性

第3節 他なるもののための身代わりの一者と存在

第4節 存在の彼方における矛盾、語ること、語られたこと

第5節 隔時性と時間空間の超越

第6節 存在の彼方における実詞化と倦怠

第5章 イリヤと存在の彼方の相違点と解釈の可能性

第1節 存在の彼方とイリヤの差異：意味と無意味

第2節 善と悪

第4節 存在の彼方もしくは手前

結論